

須田啓次 進徳丸第一次北太平洋横断特別観測報告 海洋時報第一卷(一九二九)

松平康雄 進徳丸自第十一次至第十八次、遠洋航海表面水の観測 海洋時報第二・三・四・五・八卷(一九三二—三五)

豊原義一 南洋群島地球物理學的管見 地學雜誌第四八年(一九三六)

水路部 南洋群島水路誌(一九三一)

大日本水産會 海洋調査常用表(一九二八)

水路部 海圖 南洋群島方面 三三葉

滿洲國奥陶紀産 *Nybyoceras foersteri* Endo に就て

清水三郎
小幡忠宏

滿洲國本溪湖炭坑附近の所謂五頂統より遠藤隆次博士は *Nybyoceras foersteri* Endo⁽¹⁾ を記載し、arctic type の *Nybyoceras* が滿洲國に於ても發見された事を特筆した。而して Reichert 氏も其後⁽²⁾ 上記遠藤氏の標品を檢し其等が *Nybyoceras* に屬するものと認めて *N. foersteri* の holotype を再び圖示した。一方に於て一九三四年小林貞一氏は前種と同一産地及同一地層より曩に遠藤氏が *Armenoceras penhsienense* Endo として報告したものを *Nybyoceras penhsienense* (Endo)⁽³⁾ と訂正した。以上の二種が從來東亞奥陶紀層より *Nybyoceras* として報告せられたものである。然し乍ら前

記二種は明らかに *Nybjoceras* に屬せず

Wutinoceras gen. nov. (genotype : *Nybjoceras foerstei* Endo)

Pararmenoceras gen. nov. (genotype : *Armenoceras penhsienense* Endo)^(*)

なる二新屬として獨立せしむべきものであると信ずる。以下其概要を述べよう。

Nybjoceras は一九二六年 Troedsson 氏が *Actinoceras* の一亞屬として創設したものであつて其 subgenotype は Esthonia の上部奥陶紀産の *Actinoceras (Nybjoceras) belickeli* Troedsson である。而して次の如き定義を下して居る。

“Breviconic orthoceracones with large ventral actinoceroid siphuncle, but septa of dorsal side in broad contact with annulations beneath.”

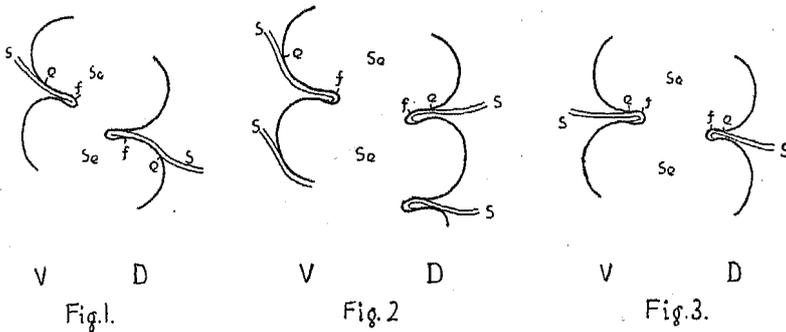
Troedsson 氏の genotype の圖版を見ると此定義に重大なる誤りをなして居る事が容易に氣付く即ち定義には actinoceroid siphuncle と記して居るが嚴密に云へば armenoceratoid siphuncle と訂正すべきものである。何となれば *Actinoceras* の septal neck は長く且つ比較的緩く曲れる爲め brim は全く隔壁と分離し siphuncular segments 相互の間隙が比較的廣きに反し、*Nybjoceras* に於ては septal neck 短く其 brim が急激に曲り隔壁に密着し segments 相互の間隙極めて狭くと恰も *Armenoceras* と同様である。後者との區別點は背側に於ける隔壁の segments に對する接觸が異なるのみである。従て *Nybjoceras* を *Actinoceras* の亞屬と見るのは正しくなからず。Foerste 氏及び Teichert 氏並に遠藤氏等が *Nybjoceras* を獨立せる屬として取扱つたのは至極妥當である。

septal neck の極めて短き點から見ると *Nybjoceras* は *Armenoceras* に近いが前者の腹背兩側に於ける隔壁の segments に對する接觸が著しく非對稱的なる特徴より *Nybjoceras* を *Armenoceratidae* の新亞科 *Nybjoceratinae* nov. に編入せん。

Nybjoceras の特徴は上記より明かであるが其中最も著しき點である處の介殼腹背兩側の siphuncular segments と septa の非對稱的接觸狀態 (即ち腹側の septa は上の segment の底縁と廣く接觸し唯單に concave に彎曲せるに反し背側の septa は下の segment の上面のみに廣く接觸して sigmoidal に彎曲して居る) 及此者の armenoceratoid septal neck を一目瞭然たらしむる爲めに Fig. 1 に圖解して置いた。

遠藤氏の所謂 *Nybjoceras foerstei* は標式的 *Nybjoceras* の示す特徴と著しく相違し Fig. 2 に圖解せる如く腹側の septa は著しく sigmoidal に彎曲し腹縁より急斜に siphuncular segments の略中央より segments の底縁に沿ひ segmental necks (siphuncular segments 相互間のくびれの端に對して右の term を假に提唱す) 迄接觸して居る

之に反し背側の殆ど總ての septa は其配置が一見水平かと思はしめる程極めて緩く背縁より斜下し segments の底部にのみ接觸して居る。但し遠藤氏の最初の圖版では背側隔壁約十個中の二個だけは先づ下の segment の上面に僅かばかり接觸したる後、上の segment の底縁と septal neck 附近に於て接觸して居る。遠藤氏は *Nybjoceras foerstei* の holotype を同氏の二種の論文に繰返し圖示して居るが同一標品であり乍ら其背側に於ける隔壁と segments の接觸狀態を二様に圖示して

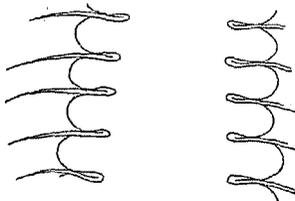


Figs. 1—3. Ideal illustration of siphuncular segments and septa of *Nybyoceras* (fig. 1), *Wutionceras* (fig. 2) and *Pararmenoceras* (fig. 3). V, ventral; D, dorsal; Se segment; S, septum; e—f, area of adnation.

居る。即ち最初の圖版では前述の如くであるが後に示した圖版では背側の隔壁は悉く一度下の segment に僅かばかり接觸したる後、上の segment の底縁に接觸する如く描かれてある。此事に關し余等の手許にある多くの標品に就き觀察せるに pseudosepta の發達著しく而も siphuncle が shell の axis に對し稍斜角を爲す廣義の *Armenoceratidae* の或者に於ては往々 pseudosepta が眞の septa より遙かに太く且つ更に明瞭にあらはれて居る故に往々 pseudosepta を眞の septa と誤解される事がある。而して斯くの如き pseudosepta が下の segment の上縁に接觸して居る事がある。今、遠藤氏の前後二度の圖版並に上述余等の觀察より考へるに、遠藤氏の後の圖版の背側の septa と segments の接觸状態は眞の septa と考へられず pseudosepta を示したものとしか思はれぬ。pseudosepta を眞の septa と誤り觀察された例は今日迄に少くない。其中最も甚だしき一例は遠藤氏が最近に發表した「滿洲の地質及鑛産」八九頁及八八頁第六五圖に *Yabettis* として掲げた新屬である。此者は正しく *Armenoceras* であり

決して新屬ではない。然るに遠藤氏の圖版には明かに septal neck が著しくS字形に彎曲し然も septal neck 或は siphonal funnel は chiochoanitic 或は prosiphonate に圖示されており又同氏近著中に介殼の横斷面が紡錘形に描かれてある。而して遠藤氏は *Yabebes* を *Lamboceras* Foerste に比較した。一體 chiochoanitic nautiloids (即ち Hyatt 氏の *Schistchoanites*) は世界に産出が極めて少い。Nicolson 氏及び Lydeker 氏に依ると僅かに次の二屬が今日迄報告されて居るに過ぎぬ。即ち奥陶紀の *Conoceras* Brown (= *Bathmoceras* Barrande) 及泥盆紀の *Nothoceras* Barrande である。余等が東北帝國大學理學部地質學古生物學教室所藏の遠藤氏の *Yabebes orientale* の原標品 (R. N. 55539) に就き詳細に檢せるに遠藤氏は明かに pseudosepta を眞の septa と誤解して居る事が容易に判明した。即ち眞の septa は Fig. 4 に示した如く標式的 *Armenoceras* 型で決して sigmoidal の彎曲をして居らず唯單に凹曲して居るに過ぎぬ。又 septal neck は著しく短かく明瞭なる monochanitic 或は brim は急激に外方に屈折し septa に全然接觸して居る。原標品は不完全なる一破片にして横斷面は全く不明で遠藤氏が *Lamboceras* のそれの如く紡錘形に描いて居るのは全然誤れる想像に依るものである。斯くの如く誤れる觀察並に想像のもとに創設されたる所謂 *Yabebes* は前述の如く *Armenoceras* に屬するものなる事は疑ふ餘地が無い。故に *Yabebes* なる屬名は當然抹消すべきである。

Fig. 4



Armenoceras wuhutsuiense
nom. nov. An enlargement
of the type specimen (Tō-
hoku Imp. Univ., R. N.
55539) showing the nummu-
loid segments and armenoc-
eratoid septal necks. $\times 2\frac{1}{2}$.

遠藤氏標品は *Armenoceras orientale* Endo に同定する事能はるる故其れに對し *Armenoceras wubutsuense* nom. nov. なる新種名を與へることとした。

遠藤氏の所謂 *Nybyoceras foerstei* Endo の septal necks は腹背兩側のものといつれも *ormoceratoid* である。従て septal necks は *Ormoceras* に近いが siphuncular segments は *Armenoceras* に似て居る。又 suture line は背側に於て廣く淺く一個の lobe を作つて居る。斯くして遠藤氏の標品は既知の何れの屬にも編入する事が出来な故に此者を genotype として新屬 *Wutinoeras* を創設する事にした。尙前述の如く本屬は新科 *Wutinoeratidae* nov. に屬せしめて置きた。此新科には右の外次の四屬が編入し得られると考へる。

Pararmenoceras Shimizu & Obata

Neowutinoeras Shimizu & Obata

Eushantungoceras Shimizu & Obata

Cyrtonybyoceras Teichert

Troedsson 氏がエストラニアの中部奥陶紀層より記載して居る *Ormoceras holomi* Troedsson (5, P. 105, Pl. LXI, fig. 2; Pl. LXII, figs. 1—2) は *Wutinoeras* に所屬す可きものと思惟す。

小林氏は又 *Armenoceras penhsienense* Endo を *Nybyoceras* に屬せしめ新に其縦斷面を掲げて居る。然るに遠藤、小林兩氏の圖版並に余等の手許にある上記と同一種の標品に就き檢せるに腹背兩側の septa と segments の接觸状態は略對稱的であり而も septa は segments の底縁のみに僅か

ばかり接觸して居る。而して siphuncular segments は *Armenoceras* 程度に膨れて居る。又 septal necks は大體 Ormoceratoid である。故に本種は *Nybjoceras* 又は *Armenoceras* の何れにも屬せしめる事は困難である。本種は *Actinoceras* と *Armenoceras* の transitional form と見る事が出來る。siphuncular segments が *Armenoceras* 程 expand するに關係して septa の area of adnation の著しく小なる事と前記の septal necks の ormoceratoid を呈する事より新屬 *Pararmenoceras* gen. nov. として獨立せしめるのが至當である。 *Pararmenoceras* は *Ragomnoeras* に酷似して居るが後者の siphuncular segments は *Haroria* の如き形を示して居る點で前者と容易に識別する事が出来る。

以上より明かなる如く arctic type の *Nybjoceras* は東亞よりは未だ其産出を見ないと云ふ結論になる。 *Nybjoceras* は Troedsson 氏並に Foerste 及 Teichert 兩氏に依ると今日迄世界中で僅かに下記の四種が報告されて居るに過ぎぬ。即ち

Nybjoceras belkerei Troedsson⁽²⁾

N. balticum (Troedsson)⁽²⁾

N. intermedium Teichert⁽²⁾

の三種がエムトニアの Lyckholm beds (上部奥陶紀)より、又

N. ulrichi Foerste & Teichert⁽²⁾

がオクラホマの下部 Chazyan より知られて居る。(一九三五年六月二十八日記)

追記。

最近遠藤隆次氏は

R. Endo : Additional Fossils from the Canadian and Ordovician Rocks of the Southern Part of Manchoukuo, Sci. Rept. Tohoku Imp. Univ., Second Ser. (Geology), Vol. XVI, No. 4, 1935^(a)

上記論文中には八種の *Nybyoceras* を記載して居るが東北帝國大學理學部地質學古生物學教室所藏に係る遠藤氏記載の原標品に就き余等が詳細に檢した處それ等は全然鑑定の誤りであつて、明かに *Nybyoceras* に屬せず次に列記せる如く訂正せんべいのと考へる。

Endo's names:—

Revised names:—

Nybyoceras gigaevanense Endo

(9, P. 207, Pl. X, fig. 14; Pl. XV, fig. 19)..... *Watinoceras* cf. *foersteri* (Endo)

N. ? annectance Endo

(9, P. 208, Pl. X, fig. 5)..... *Armenoceras annectance* (Endo)

N. compressum Endo

(9, Pl. XI, figs. 1—3)..... Gen. & Sp. indet.

N. exortivum Endo

(9, P. 209, Pl. XI, figs. 12, 13; Pl. XV, figs. 2, 3)..... *Watinoceras* Sp.

N. marginale Endo

(9, P. 209, Pl. XI, fig. 10).....*Armenoceras magnitubulatum* Endo

N. penhsienense Endo

(9, P. 210, Pl. XI, fig. 16).....*Pararmenoceras penhsienense* (Endo)?

N. tenuitubulatum Endo

(9, P. 210, Pl. XI, fig. 11).....*Gen. & Sp. indet.*

N. troedssomi Endo

(9, P. 210, Pl. XI, figs. 14, 15).....*Armenoceras* Sp.

余等は尙遠藤氏の原標品中に次記訂正表を掲げた如く更に三種の *Pararmenoceras* を發見した。

Endo's names : —

Revised names : —

Actinoeceras fuchouense Endo

(9, P. 206, Pl. X, figs. 9, 10).....*Pararmenoceras fuchouense* (Endo)

Armenoceras nakaoi Endo

(9, P. 212, Pl. XV, figs. 11 non 10).....*P. cf. nudum* (Endo)

A. nanum takayamaei Endo

(9, P. 212, Pl. XV, figs. 14, 15).....*P. cf. asiaticum* (Endo)

遠藤氏論文中に記載されて居る頭足類の原標品は概して保存不完全にして種は勿論屬の鑑定さへ覺

束ないものがある。之等に就きては遠藤氏と著しく見解を異にするものが多い。何れ遠藤氏原標品に關する余等の考察鑑定は目下執筆中の「遠藤隆次博士の滿洲奥陶紀頭足類研究の批判」なる題下に論述する豫定である。(完)一九三六年一月二十九日於上海自然科學研究所地層學研究室)

○ 参考文献

1. Endo, R.: The Presence of *Nybugoceras* in South Manchuria, Denison Univ. Bull. Jour. Sci. Laboratories, Vol. XXV, 1930, p. 297, Pl. LX.
2. Endo: The Canadian and Ordovician Formations and Fossils of South Manchuria, U. S. Nat. Mus. Bull. 164, 1932, p. 79. Pl. XXV, figs. 3—5; Pl. XXVI, figs. 9—10.
3. Kobayashi, T.: The Middle Ordovician Fauna of South Chosen, Jour. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo. Sec. II Vol. III, Pt. 8, 1934, p. 456, Pl. XXXII, fig. 1.
4. Endo: loc. cit., (1932), p. 95, Pl. XX, fig. 6; Pl. XL, fig. 15.
5. Troedsson, A. F.: On the Middle and Upper Ordovician Fauna of Northern Greenland, Pt. I, Cephalopods, Meddeleser om Gronland, Vol. LXXI, 1929, p. 106; idid, 1926, Pl. LXIII, figs. 1—3.
6. Foerste, A. F. & Teichert, C.: The Actinoceroids of East-central North America, Denison Univ. Bull. Jour. Sci. Laboratories, Vol. XXV, 1930, p. 278, Pl. XLVI, figs. 1 A—C.
7. Teichert: Der Bau actinoceroiden Cephalopoden, Palaeontographica, Vol. LXXXVIII, 1933, p. 121, 131, 145, 164, Pl. X, figs. 9—10.
8. Teichert: Einige actinoceroid Cephalopoden und aus dem Gotolanium Skandinavien, Dansk Geologisk Forening, Vol. VIII, No. 4, 1934, p. 377.
9. Endo: Additional Fossils from the Canadian and Ordovician Rocks of the Southern Part of Manchoukuo, Sci. Rept. Tohoku Imp. Univ., 2 nd Ser., Vol. XVI, No. 4, 1935.